

## 明治初期の日本貿易\*

—その統計的概観—

羽鳥敬彦

## はじめに

本稿は、明治維新以降紙幣整理の本格化する1881年までの日本貿易の状態を検討する。その際、ここでは統計的な内容をより詳しく検討することとし、立ち入った経済史的・産業史的な考察を加えることは今後の課題とした。

およそ、過去の経済的事実を探ることの意義は、単に歴史的事実の確定に終わるのではなく、むしろその現代的課題に対して何らかの示唆をえるところにあるといえることができる。というのは、研究の性質上社会科学における実証的研究とは、歴史研究といい、現状分析といい、基本的には現在からみた過去を対象とせざるをえないからであって、そうした過去の事実の検討から、われわれは将来についてのある程度の見通しを立てることができるし、理論的研究にもそれなりの材料を提供することができるからである。

さて、今日の時点に立って、維新以来の日本貿易史の足跡を新たに検討するのは、いったいいかなる意味があるのであろうか。さしあたり、次のよ

---

\*本稿は、拙稿「資本主義形成期の日本貿易」(小野一郎編『日本貿易史の研究』[仮題]三嶺書房より近刊予定、所収)の作成のために収集した材料をもとに作成されたものであり、同稿で十分に展開することができなかつた点をさらに詳しく検討したものである。

うにいておきたい。現在東アジア地域の経済的台頭にはきわめて注目すべきものがあり、世界史に新たな次元を画すかもしれない要素が含まれている、といっても過言ではない<sup>1)</sup>。そして、現象面のみを限り、この東アジア諸国の経済発展における外国貿易の役割は、外国資本（とくに直接投資）のそれとともに無視しえない重みをもっている。

他方、いい古されたことではあっても、幕末開港以来の日本の経済過程の特質は、非ヨーロッパ世界において唯一植民地・半植民地化されずに近代化＝資本主義化を遂げたものであった。かつて旧植民地・半植民地＝発展途上国といわれた国からも、かなり高度な資本主義が定着しつつある国が登場している現在からみれば、うへのいいかたはもはや古くさくなるとしなくてはならないとしても、1960年代くらいまではそれなりの妥当性をもったものであった。そうした日本の近代化の原点を、主として貿易面を通じて検討することは、古くて新しい問題である「経済発展と国際貿易」について、有益な材料を与えてくれるものと思われる<sup>2)</sup>。

ともあれ、事実の検討から始めることとしよう<sup>3)</sup>。

- 1) 今日の東アジア諸国の世界経済における位置づけについては、さしあたり、拙稿「1980年代の世界経済（下）」関西大学『商学論集』第39巻第4号、1994年10月、をみられたい。
- 2) ここで忘れてはならないことは、日本の近代化＝資本主義化は、一面日本の植民地化の危機を乗り切らせたのとほぼ同時に、東アジア地域に対する侵略を可能とさせ、事実その歩みを進めたことである。この点は、当時の世界資本主義の性格と関係することでもあるとしても、日本資本主義の特質を考える上で無視されてはならないことである。
- 3) 本稿では、開港以降の幕末期の貿易を対象とはしなかったが、少なくとも明治初期に関していえば、幕末貿易の延長線上にあるものといってい。なお、幕末貿易については、とりあえず、山口和雄『幕末貿易史』中央公論社、1943年、石井孝『幕末貿易史の研究』日本評論社、1944年、『横浜市史』第2巻、有隣堂、1959年、石井孝「幕末貿易に関する若干の統計的資料」『横浜大学論集』第5巻第2号、1953年12月、などをみよ。最近の研究は、さらに細かいところまで踏み込んではいないが、これら古典的労作の全体像を修正するまでには至っていないように思われる。ただ、生糸輸出と藩専売との関係を明らかにした、西川武臣「開港直後の横浜

## I. 時期区分

明治時代の日本貿易の時期区分について、つとに『日本貿易精覧』（東洋経済新報社、1935年）は、次のように分けている。すなわち、

第1期；1868（明治元年）—81年

第2期；1882—93年

第3期；1894—1903年

第4期；1904—14年（大正3年）

と。

本稿もこの時期区分を基本的に踏襲することとしたい。というのは、これによれば、経済史上の画期的事件によっても画されることとなるからである。すなわち、1881年は大隈財政から松方財政へ転換することとなった「明治14年政変」のおきた年であるし、93年は日清戦争の前年にあたるのであって、いずれも日本資本主義の形成にとって新次元を切り開くきっかけとなった。さらに、1904年開始の日露戦争をへて、日本資本主義は独占段階へ突入り、対外的にはその帝国主義の性格をいっそう顕著とするのであった。そして、日露戦後の1906年の一時的な好況の後、日本経済は翌年の恐慌を契機に第1次世界大戦に至るまで慢性的な不況にあえぐことになる。このことも、日本資本主義の性格変化を十分に示すものであった。

本稿では、こうした日本経済の転変を背景とした、あるいはそれを促進した明治貿易の初期の状態、すなわち第1期について、とくに統計的に概観することとし、それ以降については別稿で果たすことにしたい。まず、この時期の貿易の一般的特徴について、さきの『日本貿易精覧』は次のようにいっている。

「第一期の明治1—14年は、我が経済史で云へば、西洋の輸入技術の輸入

---

生糸売込商」『横浜開港資料館紀要』第9号、1991年3月、は、新たな研究方向を指し示すものであるように思われる。

の初期で、万事未だ混沌としていた。が、中でも通貨制度は、金銀比価の諸外国との相違及び不換紙幣の増発等で14年には遂に紙幣は、銀貨一円に対する交換率が一時一円八十一錢五厘にも上がると云ふ大暴落を来した時代である。従つて我が物価は高く、貿易は入超を続け、金銀は流出した。」(p. 16)

要するに、通貨体制の混乱により、物価が上昇し、入超の持続、そして金銀が流出した、というわけである。そこで、以下、さらに詳細にこの時期の日本貿易を観察することにより、より具体的な特徴づけを行うことにしよう。

## II. 輸出入商品構成の変化

第1表は主要商品別の輸出構成をみたものである。ここから、次のようにいうことができる。まず、生糸・茶といった幕末開港以来の主要輸出品が全体の過半を占める構造には変化なく、ただ一時かなりのウェイトをもった蚕卵紙の急減がやや目立っていることである。この点は、主要輸出品のシェアの推移をみた第2図からも確認されることである。

周知のように、当時大流行した微粒子病 (pebrine)<sup>3)</sup> のためフランス・イタリアの養蚕業が大打撃を受けたことによる蚕卵紙輸出ではあったが、一面優良な蚕種が大量に輸出されることによって日本の生糸の品質悪化に拍車をかけるものとなった。かくして、政府もその輸出規制のためにさまざまな対策を講じたわけである<sup>4)</sup>。したがって、むしろうえでみた蚕卵紙輸出の減

3) 微粒子病とは、原生動物ノセマ・ボンビシス (Nosema bombycis) が蚕に寄生して発生する病気であり、この時パスツール (Louis Pasteur ; 1822-95) がその防除のための研究を行ったことで知られている。この点については、とりあえず、ルネ・ヴァレリー＝ラド (桶谷繁雄訳) 『パスツール伝』(『世界ノンフィクション全集 11』筑摩書房、1960年) p. 49 以下、川喜田愛郎『パスツール』岩波書店、1967年、p. 113 以下、をみよ。なお、パスツールがこの研究の依頼を受けたのは1865年で、その成果を公刊したのは70年のことだった。

4) この点については、とりあえず、通商産業省編 (山口和雄・水沢知一執筆) 『商

第1表 主要商品別輸出構成の変化(%)

	1868	75	81
総額 (1,000円)	15,553	18,611	31,059
米 ・ 粃	0.0	0.1	0.8
飲食物・煙草類 茶 <sup>1)</sup>	27.5 21.5	45.9 36.2	32.4 22.1
化学・薬類	1.6	2.1	4.4
糸 類	66.6	34.8	43.2
生 糸	40.2	29.1	34.3
蚕 卵 紙	23.9	2.6	1.0
石 炭 <sup>2)</sup>	0.5	5.4	3.6
陶 磁 器	0.1	0.6	2.3
銅	0.2	2.4	2.0
金 属 製 品	0.3	0.2	2.1
雑 品	0.6	3.3	4.8
木 材	0.2	0.3	0.4
漆 器	0.1	0.9	1.7
扇・団扇	0.0	0.6	0.9
そ の 他	2.5	5.3	4.5
再 輸 出 品	0.0	3.5	1.1

[出所] 総務庁『日本長期統計総覧』第3巻, 1988年,  
東洋経済新報社『日本貿易総覧』1935年, より  
作成。

[注] 1) 茶は紅茶も含む。 2) 石炭は船舶用も含む。

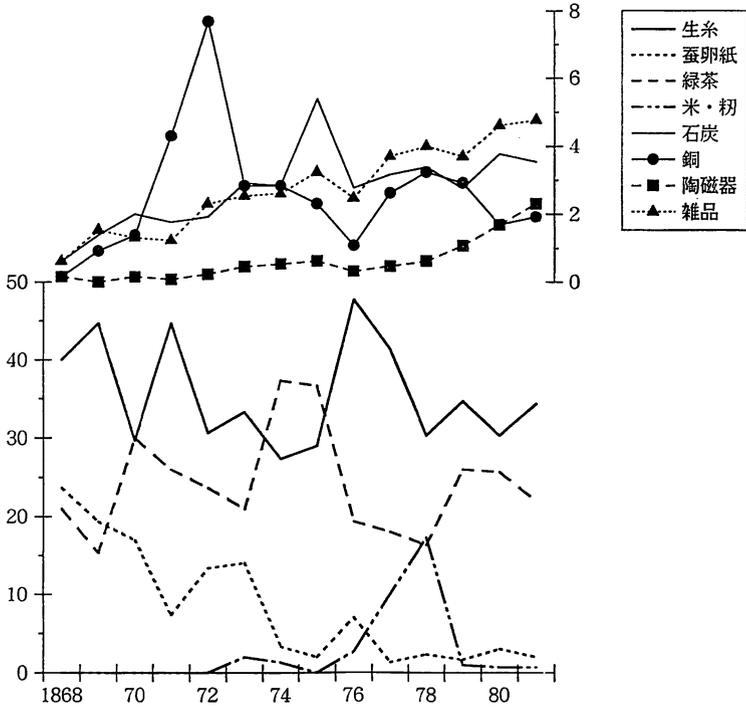
少は、日本の蚕糸業の展開にとって歓迎されるべきものであった。

そのほかの輸出商品に眼を転じると、第1図にあるように、一時的に米・粃の比率が2割くらいにまでに上昇した(1878年)とはいえ、恒常的に日本

---

工政策史 第5巻 貿易(上)』1965年, p. 118以下。当初、政府は直接的な蚕種輸出規制を行おうとしたが、外国外交団の抗議を受けたため、結局民間団体による「自主的」な規制を背後から政府が監督・支援する、というかたちをとった。

第 1 図 主要輸出商品のシェアの推移 (%)



[出所] [注]とも第1表に同じ。

が米輸出を中心とした国となることはなかった。また、第1図上段から銅輸出も一時的に伸びる(72年)ものの、その後はむしろ下降きみである。上昇傾向にあるのが、石炭、陶磁器、雑品である。このうち雑品については、第1表にあるように、木材、漆器、扇・団扇<sup>うちわ</sup>によって大半が占められ、とくに後2者が増加の中心であった。

以上まとめると、この期の商品別輸出構成は、蚕卵紙の比率の急減を別とすれば、日本在来産業の生産物を中心とする点で大きな変化はなかった、といえる。次に輸入商品構成をみることにしよう。

第2表にあるように、この時期の日本の輸入品は、綿織物・毛織物・綿織

第2表 主要商品別輸入構成の変化(%)

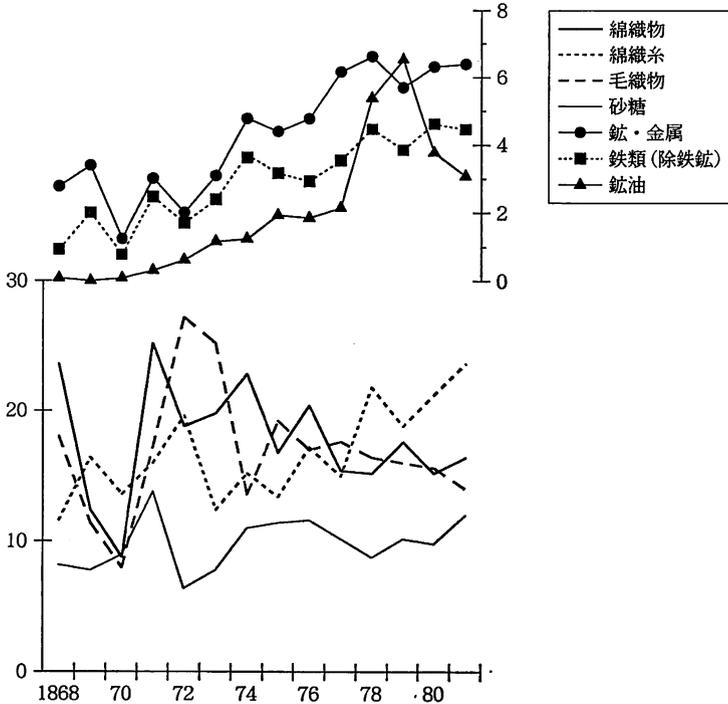
	1868	75	81
総額 (1,000円)	10,693	29,976	31,128
穀物・穀粉類	5.8	0.7	0.9
米及び粳	4.1	0.1	0.4
砂糖	8.1	11.4	12.0
鉱油	0.1	1.9	3.1
化学・薬類	2.6	6.0	2.6
染料・塗料類	0.6	2.0	2.0
糸類・同材料	15.7	15.0	24.6
実綿・繰綿	4.0	1.2	0.6
綿織糸	11.6	13.5	23.3
織物類	44.7	38.9	33.2
綿織物	23.8	16.8	16.2
毛織物	18.2	19.3	13.9
鉱・金属	2.8	4.4	6.4
鉄類(除鉄鉱)	1.0	3.2	4.6
時計・鉄砲・機械類	10.9	7.3	3.3
鉄砲類	10.4	2.1	0.1
機械類	0.4	1.7	1.6
その他	8.7	12.4	11.9

[出所] 第1表に同じ。

糸といった繊維製品および砂糖を中心とするものであった（また、1868年は内戦＝戊辰戦争のせい、鉄砲類の割合が比較的高かった）。しかしながら、興味深いのは、第2図にからも読みとれるように、しだいに綿織物・毛織物の比重が低下し、綿織糸のそれが上昇していることである<sup>5)</sup>。開港前、当然

5) なお、1869・70年にくに綿織物・毛織物の比率が急下降しているが、これは内戦と凶作のため一時的に米・粳の輸入が急増したためであった（69年は全輸入の21.3%、70年には43.3%に達した）。

第 2 図 主要輸入商品シェアの推移 (%)



〔出所〕 第1表と同じ。

〔注〕 『日本長期統計総覧』の砂糖の1868-96年の値は、明らかに砂糖の一部の値なので採用しなかった。

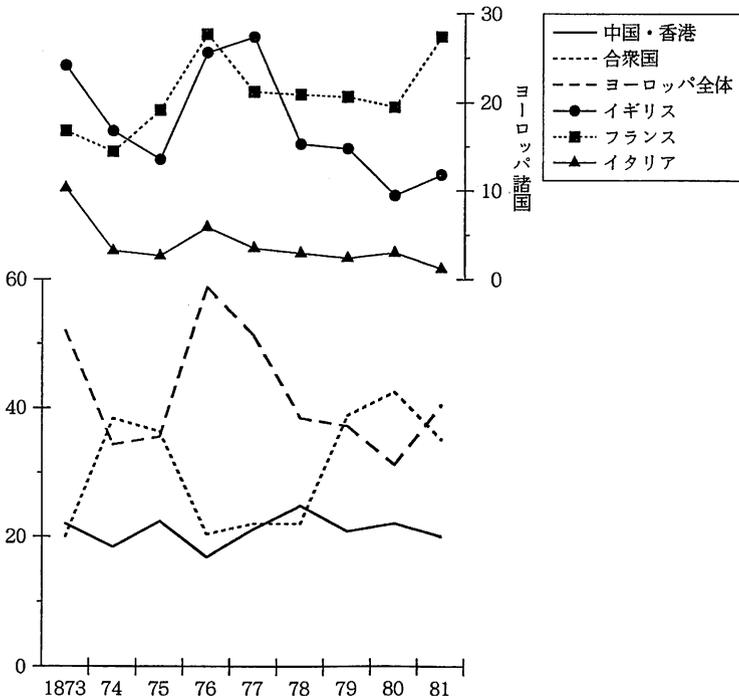
のことがながら日本の綿織物業は国内棉による綿糸を材料として綿織物生産を行ってきたわけであるが、この時期に至り外国綿糸に切り替えることによって、生き残りをはかる方向に進みだしたわけである。これに比して、砂糖は安定的な地位を保っているといえよう。また、第2図の上段からは、鉄類、鉱・金属の増加傾向をみることができる。

全体として、この時期の輸入商品構成は、若干の変化の兆しは認められるものの、繊維製品を核としたものである点において、一貫していたわけである。続いて、地域別・主要国別輸出入構成の状況をみることにしよう。

### Ⅲ. 地域別・主要国別輸出入構成の変化

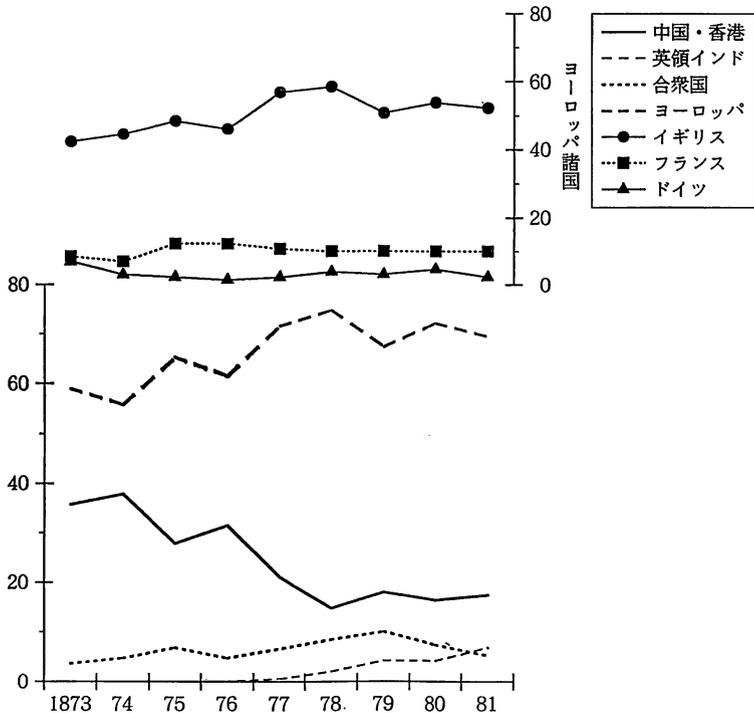
まず、主要輸出先のシェアの推移についてみると、第3図下段にあるように、中国・香港は比較的安定した地位を維持しているのに対して、合衆国とヨーロッパのそれは相反する傾向をもっている。すなわち、前者の比率の向上した1874・75年、79・80年は後者のそれは低下し、逆に後者の比率が高かった73年、76年では前者のそれは低いという状況である。そして、上段にあるヨーロッパ諸国の地位の変化をみると、下降線を描くイタリア、一時的な増加はあるものの傾向的に下がっているイギリスに対して、比較的大きい地

第3図 主要輸出先シェアの推移（％）



[出所] 第1表に同じ。

第 4 図 主要輸入先シェアの推移 (%)



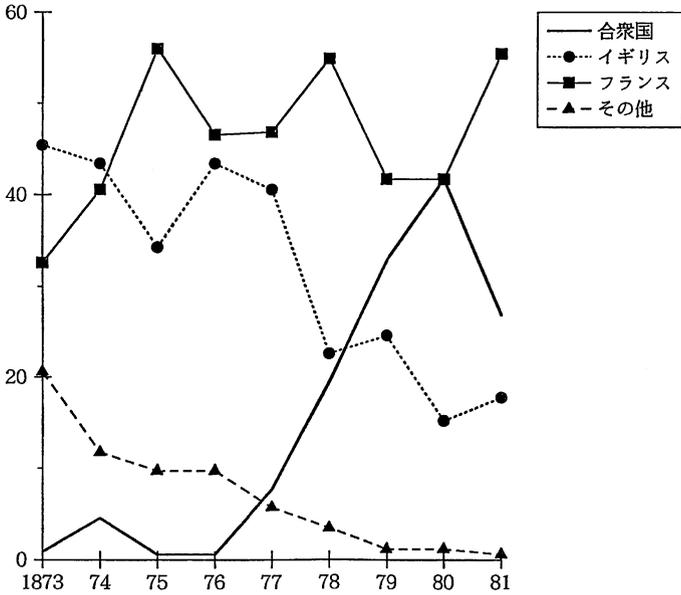
〔出所〕 第1表に同じ。

位を占めるのがフランスである。こうしてフランスは合衆国と首位を争いつつ、日本の輸出の5分の1から4分の1を吸収していたわけである。

次に、主要輸入先についてみると、主要輸出先ほどの大きな変化はみられない。すなわち、第4図にあるように、中国・香港の地位が下がり、ヨーロッパのその傾向の上昇が確認される（後述のように、初期の貿易統計は原産地を正確に表示していないと考えられるので、このいいかたにはやや誇張が含まれているであろう）。また、わずかながらではあるが、合衆国・英領インドの比率も徐々に増加している<sup>6)</sup>。さらに、上段のヨーロッパ諸国につ

6) 後に英領インドは棉花の主要輸入先になるのであるが、この時期はむしろ綿糸の輸入先であった。

第5図 生糸輸出先シェアの推移（％）



〔出所〕 『横浜市史』資料編2，1989年，より作成。

いてみると、圧倒的な位置にあるイギリスがややその地位を高めてはいるが、全体的には安定的であるということができよう。

こうした主要輸出入先の変化に関しては、主要輸出入商品の相手先の状況を見ることによって、相当程度説明することができる。

はじめに、トップの輸出品である生糸の主要輸出先をみると、第5図のようにながりの起伏を描いている。まず、上下運動を繰り返しているとはいえ、フランスの地位は趨勢的には高いままといつていいであろう。それに比べて、イギリスは持続的にその比率を低下させ、急上昇が目立つのが合衆国である。かくして、この期の末期には、日本の生糸輸出はフランス・合衆国を中心に仕向けられるようになったわけである。また、そのほかの主要輸出品品に関しては、第3表にあるように、蚕卵紙はイタリア・フランス、茶は

第 3 表 主な輸出商品の主要輸出先シェア  
(1873-81年累計, %)

蚕 卵 紙		茶	
総額 (1,000円)	9,050	総額 (1,000円)	54,570
合 衆 国	6.0	合 衆 国	94.9
フ ラ ン ス	23.2	イ ギ リ ス	1.6
イ タ リ ア	69.3	中 国	2.1
そ の 他	1.6	そ の 他	1.4

[出所] 第4表とも第5図に同じ。

第 4 表 主な輸入商品の主要輸入先シェア  
(1873-81年累計, %)

綿 織 物*		綿 糸	
総額 (1,000円)	34,165	総額 (1,000円)	50,011
イ ギ リ ス	80.9	イ ギ リ ス	86.1
中 国	16.7	イ ン ド	10.4
そ の 他	2.5	中 国	2.7
		そ の 他	0.8

\*生金巾, 晒金巾, 綿繻子の合計  
綿織物全体は 46,569千円

毛 織 物**		砂 糖***	
総額 (1,000円)	29,384	総額 (1,000円)	27,395
イ ギ リ ス	22.7	中 国・香 港	98.6
ド イ ツ	8.4	そ の 他	1.4
フ ラ ン ス	62.7		
そ の 他	6.2		

\*\*\*赤砂糖, 白砂糖の合計  
他にごくわずかの砂糖類がある。

\*\*羅紗, モスリン, イタリアン・  
クロースの合計  
毛織物全体は 45,764千円

圧倒的に合衆国, というように特定国に集中している。

次に, 主要輸入商品についてみると, 第4表のようになる。これらのうち, 綿織物・毛織物はそれぞれ73%, 64%をカバーしているだけだが, 全体の傾向をおさえることはできるであろう。結局, 綿織物・綿糸はイギリスよ

り、毛織物はフランス・イギリスより、砂糖は中国・香港より、そのほとんどを輸入している、ということになる。こうして、生糸輸出先については一定の相対的地位の変動はみられるが、主要輸出入商品はいずれも少数の特定国を相手とするものだったのである。

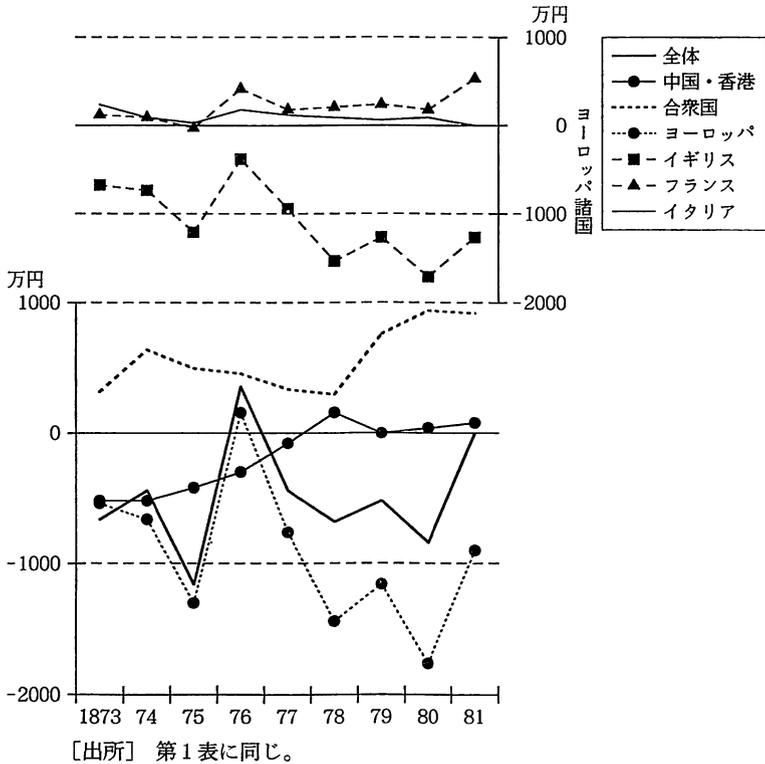
これらから、先の主要輸出入相手先の地位の変化については、次のようにいうことができるであろう。

まず、輸出先としてのイギリスの割合の低下傾向は、生糸の輸出先としてのその下落によって、イタリアの地位の低下は、日本の主要輸出品の1つであった蚕卵紙自体が輸出に占める比重を下げたことによって、それぞれ説明されよう。また、生糸の輸出先としてのフランスの大きさがさほど変化しなかったことから、同国の輸出市場としての重要度が維持された、とみることができる。合衆国の地位については、前半は茶の輸出先として、後半にはそれに加えて生糸の輸出市場としての比率の上昇から、理解することができるであろう。輸入先としてのイギリスの位置づけに関しては、輸入に占める綿織物の割合の低下傾向に対して綿糸のその上昇傾向があり、いずれもイギリスを主要供給国とするものであった、ということができるであろう。

次に、主要地域・国別の貿易収支をみると、第6図のようになる。まず、中国・香港に対しては、赤字から若干の黒字へ転化した（後述参照）。合衆国に対しては、1878年を底としてその黒字を拡大しているが、これは茶に加えて生糸の主要輸出先となっていったことにより、その理由が説明されよう。対ヨーロッパ赤字は拡大しているけれども、上段にあるようにそのほとんどは対イギリス赤字の増加によるものであって、生糸輸出市場としてのイギリスの比重の低下を考えれば、むしろ当然のことといえよう。そして、同じ生糸輸出先としての地位が維持されているフランスに対しては、貿易黒字が続くことになるわけである。

しかしながら、この時期日本貿易の相手先として、輸出では2割、輸入においても4割弱から下降したとはいえこの時期の末に至っても2割程度を占

第 6 図 主要地域・国別貿易収支



める中国との貿易は、今までみてきた一般的特徴とはかなり異なるものが含まれているので、次にやや立ち入って検討することにしよう。

### V. 対中国貿易

資料の関係もあって、第 5 表には 1874 年と 82 年のデータが掲げられている。まず、輸出についてみると、74 年と 82 年の間の大きな変化は、生糸輸出が 0% になったこと、茶・人参が大幅にその地位を下げ、樟腦のそれが大きく上昇したことである。このうち生糸については、果たしてもともと最終仕向け地が中国であったのか、という疑問が呈されるであろう。そうした点を

第5表 日本の対中国貿易の構造(%)

(1) 輸 出

	1874	82
総額 (1,000円)	3,655	5,712
椎 茸	5.8	5.8
茶	5.7	1.1
昆 布	6.8	9.3
乾 い か	10.5	11.3
い り こ	5.1	4.8
乾 鮑	5.2	5.0
寒 天	3.6	3.6
木 蠟	3.9	2.6
人 参	5.7	1.6
樟 腦	0.7	8.2
生 糸	13.7	0.0
石 炭	3.6	7.6
銅	10.2	9.1
木 材	1.3	3.4
漆 器	2.2	2.2
そ の 他	15.9	24.5

(2) 輸 入

	1874	82
総額 (1,000円)	8,360	6,548
豆 類	0.0	3.0
赤 砂 糖	22.1	42.9
白 砂 糖	8.3	23.6
氷 棒 砂 糖	1.0	1.3
皮	1.8	1.7
石 炭 油	2.2	0.0
紅 花	2.2	0.9
朱	1.1	1.0
繰 綿 糸	12.9	7.0
綿 織 糸	1.2	1.0
生 金 巾	14.4	0.0
中 国 紙	0.3	1.2
そ の 他	32.4	16.4

〔出所〕 大蔵省『大日本各港輸出入年表』1874年、『大日本外国貿易年表』1882年、より作成。

〔注〕 香港を含む。

考慮に入れても、次のことはいえるであろう。すなわち、日本の輸出は、椎茸あるいは昆布・乾いかといった農産物・水産物（とくにここで掲げられている水産物だけでも、3割を占める）、そして石炭・銅、さらに82年には樟脳が加わるといったぐあいに、水産物を中心としたさまざまな一次産品によって、輸出の主要部分が構成されているわけである。

続いて、輸入についてみると、第5表右側にあるように、1874年には14%を占めていた生金巾が82年には0%になっているが、これも果たして原産地

が中国であるか、疑義が残るであろう。このように、日本の主要輸出品である生糸と主要輸入品の綿織物のなか中心部分である生金巾<sup>7)</sup>が、統計上初期の対中国貿易に登場していることは、第6図の主要地域・国別貿易収支の初期の部分（とくに中国）、ひいてはその時期の地域別・国別データの精度について、十分に信頼のおけるものではないことをうかがわせるものである。

この生金巾を別として考えると、日本の中国からの輸入は砂糖を中心とするものへ変化していき、1882年には砂糖類によってその3分の2が占められるようになった、ということができる。

こうして明治初期の日本の対中国貿易は、水産物を中心とした各種一次産品の輸出、砂糖の輸入というように、全体からみた日本の商品別輸出入構成からとは、かけ離れた特徴を有していたわけである。

以上、この時期の日本貿易の全体的構造及びその変化をみてきた。そこで最後に、いささか視野を広げ、当時の日本の国際収支をみておくことにしよう。

#### IV. 国際収支

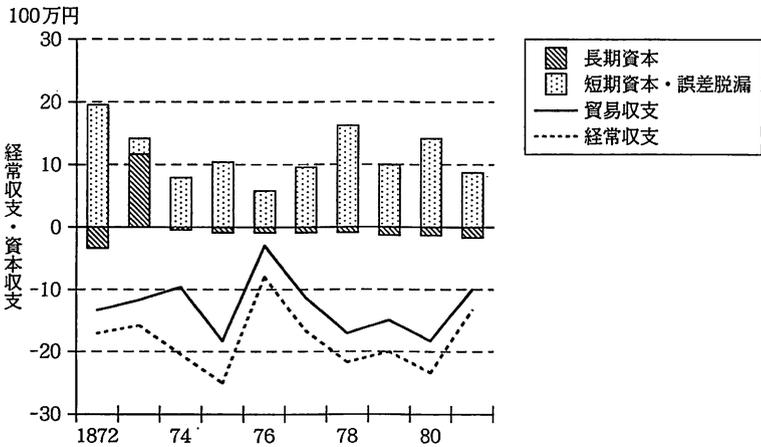
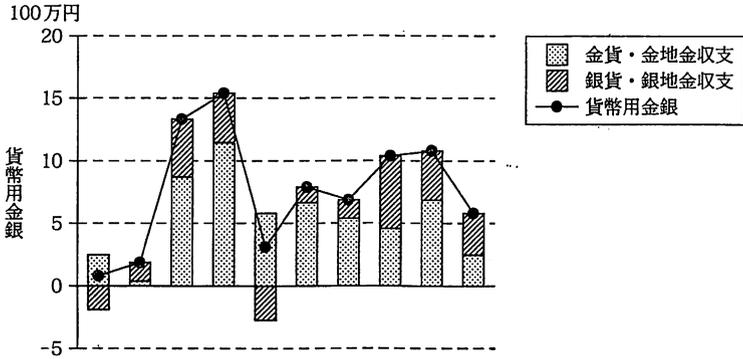
第7図は、山澤・山本、前掲書、に依拠して、この期の国際収支の推移をみたものである。まず、下段にあるように、基本的に貿易収支の形状によって経常収支の輪郭は規定されており、前者以上の赤字を後者は続けたものとされている。それをカバーしたものが、連年の短期資本輸入（あるいは誤差脱漏）と1873年の長期資本輸入<sup>8)</sup>であった（そのほかの年長期資本は純輸出

---

7) 1868年から81年までの綿織物全体の輸入累計額は6,513万円、このうち生金巾輸入累計額は3,546万円であって、54.4%を占めた。

8) 1873年の長期資本輸入は、前年募集の七分利付外国公債（募集額240万ポンド、日本政府実収額222万ポンド、同邦貨換算額1,083万円）のことである。これは、秩禄処分財源のために発行された。詳しくは、大蔵省『明治財政史』第8巻、第9巻、1904年、の当該箇所をみよ。また、千田稔「明治六年七分利付外債の募集過程」『社会経済史学』第49巻第5号、1984年2月、も、参照のこと。これより以前、明治政府は、1868年にフランス・ソシエテ・ジェネラルに対する旧幕府債務償還

第7図 国際収支の推移（1872-81年）



[出所] 山澤逸平・山本有造『長期経済統計 14 貿易と国際收支』

東洋経済新報社，1979年，より作成。

[注] 貨幣用金銀では，プラスが流出，マイナスが流入。

のため，50万ドルをイギリス・オリエンタル銀行から借入れたほか，翌年には鉄道建設のために九分利付外国公債（募集額100万ポンド）を発行したが，前記七分利付外国公債を含めていずれも「明らかに植民地的条件」のもとでの資本輸入だった（大内兵衛『日本公債論』『大内兵衛著作集』岩波書店，第2巻，1974年）p. 21。

を記録しているが、対外負債に対する償還がそのほとんどを占めているものと思われる)。しかしながら、それらをもってしても経常収支の赤字は解消されず、結局貨幣用金銀の流出、とくに金流出が持続することになったわけである。

もちろん、経常収支赤字を短期の資本流入でまかなえなかったから、金流出がおこった、とだけいうことはできない。なぜならば、1870年代以降の銀価格の金価格に対する低落によって、日本の新貨条例にもとづく公定金銀比価（金1：銀16）の関係から銀流入・金流出という現象も生じたものと考えられるからである。しかしながら、第7図にあるように、ほぼ上下対称形をなしている貿易収支と貨幣用金銀の推移の輪郭からは、やはり金銀の移動は貿易収支の動向によって制約を受けるところ大であったとみることができるように思われる。

そこで金銀の純流出について『日本貿易総覧』のデータによると、この時期の金純流出合計額は5,620万円、銀のそれは2,050万円であって、かつてしばしば喧伝された幕末開港直後の金流出額が今日「10万両内外<sup>9)</sup>」とされているのに比すれば、たいへんな額となっている。こうした貨幣用金銀、とくに金の流出は、1871年の新貨条例による日本の金本位制を早産に追い込むことになるのである。

### むすびにかえて

以上、第1期の日本貿易の状況をみてきた。ここでまとめていいうことは、輸出における蚕卵紙の減少、輸入における綿糸の増大、主要輸出先におけるイギリスの後退、など、一応の変化は認められる。とはいえ、全体的にドラスティックな再編成とはいいいがたいものであった。また、対中国貿易に

---

9) 石井孝『幕末開港期経済史研究』有隣堂、1987年、p. 121。大蔵省『貨政考要』上編、1887年（大蔵省編『明治前期財政経済史料集成』第13巻）p. 46、に掲げてある換算率を使用すると、この10万両はだいたい35～36万円に相当する。

は一般的傾向からはうかがいしれない独特の構造があったことも判明した。そうしたなかにおける、貿易収支赤字の継続に伴う貨幣用金銀の流出だったわけである。

そこで問題となるのが、持続的な貿易赤字、そして金銀の流出は何によってひきおこされたか、ということである。この点については、さきに引用したところでも『日本貿易精覧』は通貨体制の混乱に求めているが、別のところではさらにこれを強調している。すなわち、

「明治1—14年（1868-81）は維新<sup>そうそう</sup>匆々にて、我が経済は全体として混沌時代に属したが、殊に通貨は混乱を極めた。そこに明治新政府は不換紙幣を発行して歳出を支弁したため、物価は騰貴し、且つ金銀貨は紙幣に対して著しきプレミアムを生じた。此の時期の貨物貿易が入超を続けたのは、専ら之に原因する。此の十四年間に貨物貿易が統計上出超を示したのは、僅かに9年とだけであつた。明治元年にも出超だつたが之は金銀を含めての貿易だつた。而して其の入超はだいたい金銀の輸出に依つて支払はれた」(p. 18)

しかしながら、同書ではより詳細な検討がなされていないわけではない。それゆえ、この明治初期の日本貿易を考える上でとくに必要なことは、明治初期の日本の通貨制度およびその実態の変遷と貿易の動向との関連をより具体的に解明すること、ということができらばであろう<sup>10)</sup>。この点はさらに検討していくこととしたい。

---

10) この時期の通貨制度の変遷と問題点については、詳しくは、大蔵省『貨政考要』、松方正義『紙幣整理始末』1890年（日本銀行編『日本金融史資料 明治大正編』第16巻、1957年）、『明治財政史』第11巻・第12巻、1905年。さらに、『明治財政史』等を批判的な立場から検討した、沢田章『明治財政の基礎的研究』柏書房、1966年、も、参照のこと。また、1871年の新貨条例から1886年銀兌換開始＝銀本位制の確立までの、日本の貨幣制度の変遷に関する意義づけについては、小野一郎「近代的貨幣制度の成立とその性格」松井清編『日本貿易史』第1巻、有斐閣、1959年、をみよ。